



よるい

甲を着た古墳人だより



公益財団法人
群馬県埋蔵文化財調査事業団

あかだま 赤玉の発見

「甲を着た古墳人」の発見された4区の北側の9区で、「赤玉」と呼ばれる遺物が出土しました。調査区南西部寄りの平坦な場所で、6世紀初頭の榛名山二ツ岳の噴火に伴う火山灰(Hr-FA)の下から100点以上が折り重なるように姿をあらわしました。

赤玉は、赤色顔料の素材を団子状に丸めたものと考えられています。今回出土した赤玉の大きさは、直径5.5～8cm、重さ350～400gほどです。

赤玉の出土は、県内では伊勢崎市の本関町古墳群、中之条町の伊勢町地区遺跡群の例に次いで3例目で、九州地方で「朱玉^{しゅだま}」と呼ぶ円形で扁平なものが知られている他は、全国的に見ても類例の少ないものです。なお、本関町古墳群では15点、伊勢町地区遺跡群では2点の出土であり、金井東裏遺跡での出土数も注目される量といえます。

赤い色は、古墳時代には神聖な意味があったようで、土器や埴輪に塗られたほか、古墳の石室の壁に塗られることもあります。



赤玉の出土状況

重なっている状態を、平面図や断面図、さらに出土した状態の写真などの詳細な記録を取りながら調査を進め、そのあとで壊さないように慎重に取り上げました。



大きさは、直径で5.5 cm～8 cmほどのものがあります。

写真にあるスケールは20 cmです。

重さは、取り上げたときは350 g～400 gほどです。



赤玉は、4～5段ほど積まれていて、ちょうどお月見の団子を重ねているようです。

100個以上あることは確かですが、地面に近いところは湿っていたためか崩れているため、正確な数はわかりません。



赤玉は、赤色の顔料の素材を団子状に丸めたものと考えていますが、赤色の正体を明らかにするために、今後、赤玉の成分や焼成の有無などの化学的な分析をしていく予定です。



赤玉が発見された地点の南にある5世紀後半の住居跡の中で見つかった棒状の礫^{れき}です。礫の周りに帯状に赤い線が引かれており、赤玉との関係が注目されています。

